

活動報告書

報告者氏名:市口 朋子

所属: 大分県立南石垣支援学校

記録日:平成26年 2月14日

【対象群の情報】

- ・学年 高等部 3年 職業生活科 情報1班選択生 9名
- ・障害名 知的障害
- ・障害と困難の内容

一般就労もしくは移行支援を目指しているこのグループの生徒のほとんどは、作業を遂行する基礎的能力が高い。しかし、自分の周りのあらゆる環境に強い関心を示しながらも、そこで抱いた疑問の答えを探ること・解決したい問題を処理することや、場面など状況を把握して具体的な方策を考える事には慣れていない。問題解決について思いついた手立てを、積極的に試みようとする事に躊躇する傾向にある。

そのため、社会生活特に就労の場面に於いては、「わからないことをそのままにしている」「常に援助を期待している」「周りにやる気が伝わらない」と周囲に映り、相手から期待していた返事や状況が得られない状況となり、自己肯定観が低下していくことにつながっている。

また、自分の行動を客観的に捉えることが苦手で、他者との関係性や自分や相手の立場・自分が周囲にどのように期待され求められているかを理解するためには、ソーシャルストーリーを用いた説明や平易な言葉・視覚的なツールでの提示が必要になる。

【活動目的】

《当初のねらい》

～情報の積極的な発信とコミュニケーションツールの活用～

- 自分の伝えたいことを集約・記録することと相手に提示するための補助機能としての写真や動画・メモアプリが利用できるようになる。
- コミュニケーションの補助ツールとしてインターネット上のサービスを適切に利用する中で、資料や記録の有用性および良好なコミュニケーションのあり方を学び、卒業後の社会生活に安心感や期待感をもつことができるようになる。
- ・実施期間 平成 25 年 7 月～平成 26 年 2 月(予定)
- ・実施者 市口朋子(特別教育支援士)
- ・実施者と対象群の関係 授業「情報」担当(週1時間)

【活動内容と対象群の変化】

《対象群の事前の状況》

友達と一緒に遊ぶことや活動することは好むが、他の人からどう見られているかを気にして活動そのものに集中できないことがある。

大切な話の内容を忘れてしまったが相手に確認することができず、また確認の手だてもいくつかの方法から適切なものを選択するのに時間がかかり困ることが多い。話の内容がわからないままで、不安に感じて言動が荒くなることや活動に参加できず固まってしまうことがあった。

iPadについては、基本的な操作は習得しており、学習系のアプリなどシンプルな機能のアプリケーションは使用できる。パソコンの操作は、文字入力については時間をかけると正しく入力ができ、基本的なインターネット検索もできる。

《活動の具体的内容》

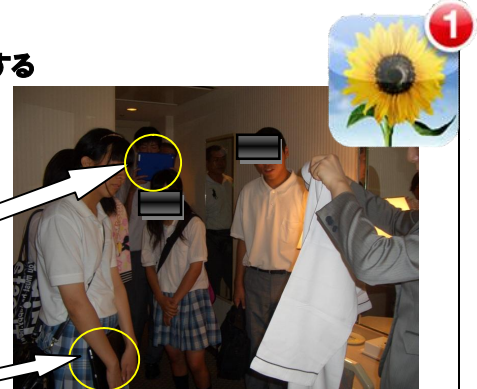
① 校外学習にて活動の記録を写真と動画で撮影し、フォストリームで共有する

今後の生活の中での記録の必要性和観点を伝えた後、各班で資料となる写真や動画を撮影し、写真についてはフォストリームを用い各班で共有をした。

室内着の使い方を動画で撮影中

写真:大分市内のホテルにて、ホテルのスタッフに部屋の使い方の説明を受けている。iPadで写真と動画をとる生徒とで後日内容を照らし合わせ確認をした。

近くから写真を撮影



② LINEを用いた情報モラルの学習

講師を招き情報モラルの学習を行った。

LINEのアプリをダウンロードしたiPadをふたりで1台使用し、トーク(チャット機能)を体験した。トークの履歴を振り返り、お互いにコメントした時の気持ちやコメントの意図を確認した。

写真:トークの体験中。生徒用5台と外部講師1台・教員1台の計7台でコメントのやり取りをしている



③ フォストリームを用いた修学旅行等の画像共有・配信

フォストリームを用いて学校外での活動中に各班の活動の様子を画像で共有した。また校内にいる児童生徒や教職員向けに活動の様子をリアルタイムに配信した。配信については、生徒自らグループ内で話し合い配信する写真を選定した。

④ 修学旅行の様子をブログで配信・LINEでの活動レポート送信

パスワードロックをかけて校内限定でブログを設定し修学旅行での様子を配信した。

LINEで校外での活動の様子を班ごとに共有した。

移動の車中で、ブログの更新
レポートの下書きを作成



⑤ Gmailを活用した課題の送受信とレポート作成

パソコンで文書作成や情報の検索を行ったレポートをGmailで送受信し、iPadでも閲覧・利用した。デジタルデータをパソコン室以外でも利用し、生活単元学習で余暇活動の計画立て・教室での資料提示などに活用できた。

《対象群の事後の変化》

① 写真や動画と記録の関係が最初はわからずとまどっていたが、写真やビデオをみながら自分で解説することで、メモや記憶を頼りに話をするより伝えたいことを具体的に相手に提示できることが理解できた。その後も生徒が自分から申し出て活動の記録を生徒相互に写真や動画で撮影し、お互いの活動の様子を動画や写真を介して話し合うようになった。フォストリームについては夏のバージョンアップ前は写真を共有する環境やプロセスが理解しにくいよう操作を教員に頼ることが多かったが、バージョンアップ後インターフェースが改善され使いやすくなり校内での様々な活動にも積極的に使用するようになった。

② 今までに LINE を使ったことがある生徒は9名中2名。LINE に対してテレビの CM などでいい印象を持っていた様子があり意欲的に取り組んでいたが、実際のトークを10分体験した後は「楽しかった」という生徒と「したくない」という生徒に分かれた。それぞれの理由を受けて「コミュニケーションの方法はそれぞれで選ぶことができる」ことを伝え、授業後に「卒業してからもみんなと連絡を取りたい」「間違っ
て伝わったら嫌だ」「私は LINE より普通のメールがいい」などの発言がみられ、「なんかあったら先生に相談してもいいんでなあ」と確認をする生徒もいた。

③ 撮影した写真から「これ、わかりやすいよね」「にぎやかな感じが伝わるかな」と受け手の気持ちを考えて写真を選択し学校に送信した。迷った時は同じグループ内で「どれがいいかなあ」と iPad を囲み相談する様子もみられた。またアプリ「カンペ」を使い、送信する写真にインデックスをつけ自分にも相手にも見やすくする工夫がみられた。写真加工アプリなども使い、カラー調整やスタンプなどで写真をより自分の印象に近いイメージに加工して投稿することもあった。

④ ブログに書いた記事にコメントがつくのが楽しいようで、ブログ記事を書いた1時間後にアクセス解析のページをみて喜んでた。またブログ更新については、コメントを見て内容を変更したり前の記事を補足するものを書いたり工夫が見られた。学校内での活動が中心の時期は「直接伝える」「メールでもいい」とブログでの情報伝達を選ぶことが少なかった。

⑤ Gmailなどのネットワーク環境を活用することで、仕事も個人的なやりとりも機能的にすすめることができ、自分と他の人のやりとりの履歴としても便利に使うことができた。iPadでの学習が回数を重なってきたとき、文字入力が100字を超えると疲れるという生徒の意見があった。そこで文書作成はパソコンで、持ち出しての閲覧はiPadでと役割を分けることでそれぞれの長所を活かしてデータを活用することができた。



伝えたいことを写真で
確認・具体的に提示



フォストリームでの
校内画像配信

【報告者の気づきとエビデンス】

《写真・動画とデータの活用》

以前は写真や動画を撮ることも撮られることも見ることも消極的だった集団が、1学期の終わりには活動の際にカメラやiPadを携帯し積極的に資料となりうる掲示物や建物などを記録する様子がみられるようになった。また2学期には、活動の様子を写真や動画に積極的に記録して自らの行動を振り返り、次の活動の目標や計画を作成する様子が見られた。これらは画像を外部メモリとして利用し自分の記憶を補うことで、確実な情報から計画が立てられる安心感と客観的な情報から活動を遂行しようとする意欲の表れと評価している。また、生徒の「今までメモを取るのが間に合わなかったけど、これなら(動画をみながら)あとからゆっくり聞きなおして書くことができる」という話から、聞いたことをメモするという一連の行動に時間がかかる生徒には、話の内容を確実に理解するためのツールとして動画は有効であると考え

る。写真(静止画)においても、事後に写真を見て細部を確認するなど記憶を補完する役割を果たしている。

《SNS の特性と活用場面》

加えてLINEの体験前はニュース等で取り上げられているLINEが関係する事件について「一部の特別な人のトラブル」として生徒は認識していた。しかし、実際のやり取りの体験で、短いコメントやスタンプだけでは自分の気持ちが伝わっていないことを感じた生徒の中には苛立ちを露わにする者もいた。わかりにくいやり取りやつながりが不安や不信感を増長する体験を通して、インターネット上のコミュニケーションに対し安全や安心を求める気持ちも強くなったようである。一方で修学旅行や校外学習等での班別行動において、他の班の動きをリアルタイムに把握し自らの動きを決める要素を得られることを学んだ。また、修学旅行時引率教員が連絡にLINEを使い、生徒の前で実際に定時連絡や全ての引率教員に一齐に連絡する場合などに活用している様子を機能や状況を説明しながら見せた。こういった活動を通してLINEなどのSNSは伝達する内容や場面によってメールや電話と使い分け効率よく連絡を取り合うことができることを理解していった。2学期・3学期は生徒自身が「LINEで連絡する」「電話をかける」「メールする」「写真で伝える」など情報の形態や内容によって伝え方を選択し、伴って表現も場面によって適切なものを選ぶようとするなど変化が見られた。SNSは使い方・関わり方によって自分たちの生活の困りを解消することも、場合によっては困りを生み出すことも学習することができる。



《移動体通信による情報交換のメリット》

フォストリームやブログ・LINEを使った情報配信はリアルタイムで情報の送受信が成立することから、様々な活動のその場での振り返りおよび事後学習にも有効であった。発信したことに対するレスポンスが早く、自分が伝えたいことがどのように伝わっているかがその場でわかるため、早い段階での活動の修正や情報の客観的な解釈に効果的に作用した。その情報が視覚情報で且つ履歴が残ることも、情報の解釈や行動の決定に必要な生徒には情報を把握しやすい。修学旅行の際にLINEで他の班に自分の班の様子を送信した生徒は、トークの履歴を何度も確認しながら同じ写真やコメントを送信しないように、また相手のコメントを読み返して意味をしっかりとつかもうと再読している姿が見られた。

《パソコンと移動体通信機器の使い分け》

これらの情報を用途や情報量に応じてパソコンと使い分け、容量の大きい情報やiPadの管理はパソコンで行い情報の携帯や活動に応じたアプリケーションの利用についてはiPadと場面によってどちらを使うかを選択できるようになった。卒業後にスマートフォンやタブレットが欲しいと購入を検討する生徒もいる。所有していない7名にもし購入するとしたら何に使いたいかと聞くと、6名の生徒が写真の共有・メールやSNSでの友達とのやりとりと答えている。彼らはオンラインゲームなどの存在も知っているが、この1年間の情報の学習の中で「遊ぶアイテム」ではなく「仲間とつながり生活を支えるアイテム」としてのスマートフォンの存在を意識していることがうかがえる。今回の取り組みで20のアプリケーションを生徒に提供し一緒に使用したところ、凝ったゲームや情報収集系のアプリよりも汎用性の高いデフォルトの機能やシンプルな構成や機能のアプリケーション(ホワイトボード系アプリ・写真加工・電卓・辞書・タイムタイマー・乗換案内など)が特に使用頻度が高かった。

《活用とともに安心安全の保障を》

iPadを使用した学習場面の設定によって自分の気持ちや意見を出しやすい環境が整い、彼らは徐々にわかり合うことや伝えあうことでの安心感や期待感を得ることができている。この春卒業していく対象群の生徒達は「スマホとかわからなかったら、学校に来て先生にきいてもいいんでな」「スマホやタブレットで困ったときには携帯電話屋さんでも教えてくれるよね」と担当教員に確かめに来ている。「落としたりなくしたときはどうするん?」「壊れてもただで修理してくれるんでな?」社会に出てから後、さらに自分の生活に合った携帯端末の使い方をいろんな人と相談しながら作っていくこと

は、自分仕様の携帯端末を作っただけでなく自分の使い方を他の人に相談し知ってもらうことでネット上のトラブルを防ぐ手立てにもつながる。携帯端末は「オンライン上」の仲間とつながり生活を支えるアイテムではあるが、連絡を取りあい会う約束をしたり必要な情報を集めて活動を実現したりと、現実生活の仲間とのつながりへと導くアイテムでもある。今回の取り組みで、生活の基盤である現実世界を彼らが大切なものとしてゆるぎなく認識できたことも、彼らの情報発信や活用の技術の向上と同様に大きな成果であると考えている。

携帯端末の使い方・活用方法とともに、インターネットを利用にあたり想定されるトラブルについてもあわせて伝えることで卒業後安心して携帯端末を使用できるよう指導の場を設定していきたい。